家の支配地となっていた(『真岡市史』

加えてこの地は、

18世紀半ばから一

てはしのびない」と。

を救ったのだった。 を担保に差し出し、 明治初期の産業振興にうってつけの条件を

った。

「小野組が閉鎖することで、せつかく

利のある河岸ということも併せて、 最モ養蚕ノ便地」と記されている。

柳林は 水運に

を招いて窮状を訴えた栄一に、 栄一の銀行業の頓挫を意味する。

市兵衛は言

市兵衛

ずんでいる。碑の篆額は、最後の輪王寺宮る巨大な石碑が木々の中にひっそりとたた

日光東照宮旧宝物殿の南に、

7mもあ

で奥羽越列藩同盟の盟主にも擁された、

の小野組から資金を回収できないことは、 いた小野組を大口の融資先としていた。そ

略則には「土壌膏腧(肥沃なこと)ニシテ

地となる。

そのことを示すように、

前述の

の人々を苦しめた。

だがそれと引き替え

年に大蔵省を辞して創業した第一国立銀 経営破綻だった。 栄一が明治 6(1873) が番頭をつとめていた京都の豪商・小野組の

多くの府県の公金収支を請け負って

栄

日光を保つ

そこに形成される氾濫原は肥沃な土

行は、

水系は古くから、頻繁に氾濫しては流域

えていたことは一目瞭然である。

鬼怒川

あった生糸に力を傾注すべきだと彼らが考

枢機トス」とあり、

当時最大の輸出品で

製茶ハ現今開産中ノ要品ニシテ国家富殖ノ れる「柳林農社申合略則」には、「養蚕

で

長く交誼を結んでいた。

両者の結びつきが深まる契機は、

末、今はのどかな田園地帯となって、式会社・柳林農社のあった場所は、

盛衰の

今はのどかな田園地帯となっている

ちの実業界の巨頭が揃って投資を試みた株

栄一と市兵衛。近代産業の萌芽期にの

後のことである。

渋沢子爵家文書に含ま

官営富岡製糸場の創設から、わずか二年

のちに銅山王との異名を取るまでになる

古河市兵衛であった。栄一は、

のちに

を構えた(現在の旧古河庭園)。

の渋沢邸から歩いて十分ほどの場所に邸宅 から」という理由で飛鳥山(東京都北区) 衛の子虎之助は、「渋沢さんの家の近くだ

このとき、株主のひとりに加わったのが、

『古河市兵衛翁伝』の中で陸奥宗光と並ん

「師友」と称されるほど、市兵衛とは

とも)とタッグを組んで取りかかった 同じく従兄の尾高淳忠(「じゅんちゅ

景には、

両人の強い思い入れもあろう。

に縁のある地で興された事業への出資の背

終生続いた盟友関係は子孫にも及び、 間貴晩晴(人間晩晴を貴ぶ)」が今も残る。

市兵

な経緯で一橋慶喜に仕官している。

主家

する従兄の喜作とともに、株主となってい

福田の一族の女性よしを妻と

足尾銅山を興した古河市兵衛(国立国会図書館デジタルコレクションより)。彼の死後に編まれた一代記[古河市兵衛翁伝]では、その序

陰には、 館・掛水倶楽部に、栄一揮毫の書「人鉱業が来賓の接待のために築いた洋 便宜を求める書簡を送り、 のちに市兵衛が鉱山事業に参入し その恩義に報いようとしたのだろう。 関係の深さを物語るように、 ようとした際は大蔵卿・大隈重信に (1880) 年には足尾鉱山組合に も加盟している。 栄一は市兵衛の人物を見込んで、 栄一の支援があったのだ。 足尾銅山の隆盛の 明 治 13

地方富源を目指す

どは、 まで、 も多いかもしれない されて国事に奔走した若き日の栄一の姿な く知られているが、尊王攘夷思想に影響 を遂げてからの好々爺然とした肖像はよ はなかったように思う。 をした人物だが、新紙幣の顔に選ばれる 本近代の実業と経済の発展に多大な貢献 けて数々の企業・団体の創設に関わり、 かったのではないだろうか。今年の大河ド 青年の姿に、 げられた布、 豊かに繁る藍畑と爽やかに翻る染め 今般の放送で初めて知ったという人 世間における知名度はさほど高く 渋沢栄一。 新鮮さを感じた視聴者は多 その中を走り抜ける闊達な 明治から昭和にか また、功成り名

子製紙・東京瓦斯・東京海上保険会社 紡績会社・富岡製糸場などに始まり、 立銀行・日本鉄道会社・帝国ホテル・大阪 一が関わった企業・団体は、 第一

> ひとつの懸念があった。 こうした華々しい業績の傍らで、 がるものも含め、枚挙にいとまがない。だが、 に載るようなものや現代の大企業にもつな 東京石川島造船所など、 日本史の教科書

がある。 の著作 明 治 45 『青淵百話』には、 1912) 年に刊行された栄 こんな一文

ならば、 衰微して、 らば、 きものであろうと信ずる。 源、 給を潤沢にし、 ……国家にとっての地方は真に元気の根 うなことに、 ます都会に輻湊 各地方に適当な事業が起こらなかったな 都会の膨張するその反比例に地方は 富裕の源泉である。 地方における有為の人物は、 都会の事業に比して必ず遜色な 遂には国家の元気を損するよ なりはせぬかと心配である。 地方富源の開拓を企つる (一箇所に集中すること) ゆえに資本の供

栄一には

家の富源

栃木県立博物館

主任研究員

真弓

りを探る。

新紙幣の顔、そして今年の大河ド

ラマの主人公と、今何かと世間の耳

目を集めている人物──渋沢栄一 日本の資本主義の父とも称され、東

京商工会議所初代会頭を務めた彼

は、「地方の発展なくして国家の繁

栄なし」という考えのもと、栃木県

で芽生えた近代産業に対しても、そ

の伸長を陰に日向に支え続けた。こ

こでは、そんな栄一と本県とのゆか

栄

は、現在の真岡市。 鬼怒川業に携わることになった地 手がける栃木県で初めての 福田彦四郎が養蚕と製茶を に、明治7 沿いの小さな河岸だった柳林 株式会社を設立する。 1874 年、

の荒廃から立ち直りつつあっ **交流し、彼らが手がける事地元の名望家らと積極的に** た栃木も、 業を支援した。 方産業の要所を訪問しては うに、栄一は精力的に地 その例外ではな 戊辰戦争で

日光ホテルの創立費を支援する

(大谷の盤水館に宿泊)

塩原に避暑(明賀屋に宿泊)

1913 (大正2)年 4月 日光東照宮三百年祭奉斎会の顧問となる

日本鉄道の理事会で日光鉄道の建設を訴える

桐生・足利・館林の織物工場、足利学校などを訪問

宇都宮を訪問、下野各銀行の懇親会にて演説をおこなう

宇都宮商工会議所で上野松次郎ら会員約500人を前に講演

栃木を興す

栄一が初めて栃木での事

1888 (明治21)年 9月

1889 (明治22)年 6月

1899 (明治32)年 5月

1910 (明治43)年 6月

1916 (大正5)年 8月

10月

この懸念を自ら払拭す

渋沢栄一と栃木略年表

1874 (明治7)年 1月 柳林農社(真岡)の起業に関わる 1880 (明治13)年 1月 古河市兵衛らが設立した足尾鉱山組合に加盟 1886 (明治19)年11月 両毛鉄道の敷設出願を支援する 1887 (明治20)年10月 下野麻紡績会社設立の発起人となる

組織された。栄一も、その会員のひとりだ。 順四郎・矢板武らといった日光にゆかり と景勝を護るべく、 明治に入り幕府の庇護を失った日光の社寺 篆額には、「保晃会碑」とある。保晃会は、 北白川宮能久親王。撰文は、 深い人々によって明治12(1879)年に 政財界の要人や安生 勝海舟だ。

での寄附金募集の書簡が栃木県立博物館 原石鼎が作成した東京府下賛成会員連名 ために広く寄附金を呼びかけたが、 物たちの名がずらりと並ぶ。 に収蔵されている。ここには、 保晃会は、社寺の修繕や山内の整備の 前島密、榎本武揚など錚々たる人 山岡鉄舟、 安田善次郎、 大鳥圭 俳人

という地そのものの保全を各方面に訴え 彼らの中でも栄一は特に熱心に、 増え続ける外国人観光客の需要に応



日光東照宮旧宝物殿の南側に広がる庭園 「浩養園 (こうようえん)」 にたたずむ、保晃会碑。 勝海舟の談話集 『氷川清話 (ひかわせいわ)』 には、石巻産の石を特別な汽車で輸送した話が記されている



鹿沼の名望家・鈴木要三を中心に、栄一らが発起人となって設立された下野麻紡績会社は、 近江麻糸紡績会社・大阪麻糸株式会社などとの合同ののち、日露戦争後に帝国製麻株式会 社鹿沼製品工場となる(『帝国製麻営業案内』より)



明治 23(1890)年に運行がはじまった日光鉄道の終点、日光駅。現在の駅舎は大正元(1912)年に落成した 2 代目のもので、日光東照宮三百年奉斎会に出席する際に栄一はここから降り立って金谷ホテルに向かった



日光奉行所の跡地に建設された日光ホテルは、栄一が創立費を扶助している。明治 45 年刊行の『日光案内記』(栃木県立博物館所蔵)では「金谷ホテルと同じく西洋人を重もなる客とす」とある。この建物は大正 15 (1926) 年に火災で失われ、現存しない

栃木県立博物館

「歴史収蔵庫で見つけた! 渋沢栄一の足跡」

5月22日(土)~6月27日(日)

企画展「収蔵庫は宝の山!~博物館の資料収集活動~」4月24日(土)~6月27 日(日)に関連して、当館の歴史分野の収蔵品から栃木県における渋沢栄一が 関係した事績をご紹介する展示です。『下野国誌』に寄せられた序や、横松倫-郎に宛てた書簡など、渋沢栄一の直筆資料も初公開します。

一般 = 260円/大·高校生 = 120円/中学生以下 = 無料 栃木県立博物館 ☎028-634-1311

※新型コロナウイルス対策により休館、延期になる場合がありますので、お出かけの際は事前にお確かめください。 詳しくはホームページ等でご確認ください。

の築造、 尊王攘夷思想に傾倒して行動に移そうと 尾高淳忠から薫陶を受けたこともあり、 念が見え隠れしているように思える。 たのだろうか。ここには、 振興という視点のみから生まれたものだっ せたいという心情は、 斎会の会長となり、 た事業は数知れない。 うな宿泊拠点の整備など、 の日光東照宮三百年祭に当たっては奉 日光ホテル(日光奉行所跡) の敷設、 には掲載されず、 し日の栄一 日光を護りたい、 日光駅 (現JR日光駅) そのために幕府から追 は、 同祭を大々的に執り ただ殖産興業・ 水戸学を学んだ もうひとつの存 4 栄 日光を隆盛さ 倫一郎との間 19 が支援し $\frac{1}{5}$ 観光 のよ

> 鳥羽 慶喜は える覚悟が芽生えたのだろう。 服の念を抱くようになり、 ようになった。 れからという だけだったという に日頃抱いていた趣意をぶつけた栄一に、 会を設けてくれた。 主張を受けて、 にある現状を直接訴えたいというふたり 逃亡生活で困窮していたときに拾い 郎だった。 たのが、 伏見の戦いの逃亡以来 「ただフンフンと聞いて居られる」 もの慶喜は、 栄一もまた慶喜の人柄に敬 特別に慶喜に拝謁する機 橋慶喜の 怯懦と嘲られても、 (『雨夜譚』)。 これを好機とばかり 幕府が瓦解の危機 栄一に一目置く 幕臣として仕 だが、 この後、 そ

京都を転々とすることになるのだが、われる立場になり、喜作とともに汀

喜作とともに江 平時で 続く

えるかたちで進めた、

日光鉄道

(現丁

日光東照宮の参道、石鳥居の手前にある社号標は大正13(1924)年に 建立されたもので、文字は渋沢栄一の揮毫による

下

野

玉

誌

21

がそのまま書籍の口絵に掲載されてしまっ

たこともある

(『煉瓦要説』)。

媚な地・日光を、護っていくこと。 川幕府の権威を示す象徴でもある日光東 里塚のひとつだったのかも 最後の将軍・徳川慶喜。 を寄 の目標を達成するための道筋にある、

しれない

から受け 郎宛の 「序」 保管していた。 帳面な人物で、 のときの版木が、 を刊行した横松倫一 木の保存に尽力し、 て当館に所蔵されている。 真岡市)の国学者河野守弘が、 が原稿用紙にしたため 寧に巻子 -後の、 野国の地誌をまとめ 野国誌』を刊行した。 下野国芳賀郡大道泉(現 と題された文と、 が生まれてちょうど十 嘉永 3 6 年 通の書簡が含ま 取った書簡類もまた 状に装して大切に この中に、 各界関係者 れている。版 8 5 倫 栄 5

大正 5 年に刊行さ n

> 多という 念子 德西即 よ谷典や 金の親戚屋品表生 後老 行事

交流があった。栄一は顕三の遺稿集『春雲楼遺稿』も刊行している

『下野国誌』に栄一が寄せた「序」。甲田顕三こと河野顕三は、下野国河内郡吉田村(現下野市)の医 師の子で、文久2(1862)年に坂下門外の変を起こした尊攘派志士のひとり。栄一の従兄・長七郎と

のみ要求されて商人にはその気風が備わら に寄せた「序」には、 なかったが、商才とこの武士的精神は背 するものではないと説く。 を含む複雑な道徳であり、 ことができると栄一は論じた。『下野国誌』 業に当たることで、 日本は世界に比肩する こうした彼の思想の 武士道を以て実 かつては武士に

にわたり記された「序」には、

だけのものとなった。

だが、

原稿用紙二枚

たるものなり。 坂下門外にて要撃し、

[中略]

一事の余が心を刺

事ならずして斃れ

短い文章の

激して今なお猶忘るる能はざるものあり。

顕三君母堂の言、是なり。

日く、

るに翁の薫陶、

之を養成したるものなり

三君の精神は外戚の家系に感奮し、

加 題

に成りたるに於てをや。

因て以為く、

懐にせし斬奸状と称するものは、

翁の筆

義に仗りて節に殉するは烈士

吾児も亦烈士たるを得る

中にも栄一の人生哲学のひとつとも言える

エッセンスがこめられていた。

ŧ

翁の外孫

甲田田

頭三君

(坂下門外の変に

る。

斯母ありて

斯るなり、

即ち実業道なり

がある。

一魂商才」

「武士道は

(栄二)

又其徳廉をも詳かにせずといへどへ一)は翁(河野守弘)と一面の

其壮烈、 らむや

実に懦夫をして立たしむるに足

毫も悲涙哀惜の状なかりき

なった

それに通じるものに、

著書

『論語

端が垣間見えてならない

に似たり。 の行なり、

其一死の如き、

復た何をか憾

の考え方は、近年広く知られるように

がしばしば主張した「経済道徳合

あるを以て、

た志士・

その事を記述して以上序河野顕三) とは文字の交

安藤閣老残(老中・安藤信正のこと)

を発せざるを得ざるなり。

顕三君の母堂は即翁の女なることを。

更に斯父ありて斯女ありの感

自滅を招

と説く。

敢為、

礼譲など

がなければ、

必要だが

翁の伝記を見るに及びて、

初て知る、

蓋し顕三君は文久二年

利己に偏りがちな個人主 まった気配すらある。 とかく先行きの が説いたこれらの コロナ禍で、 混迷はさらに深 蔓延が囁か

不透明な現代にお

5 天地人 May 2021

実は栄一の序は掲載さ

回復が、栄一の人生のひとつの目標となる。

彼が連なった徳

なっているから、 主旨が記されており、 は完成したが、

残念ながら刊行までに間

日付は同年7月に

そして東照宮を懐に抱く風光明

それらは、

の多かった栄一だが、

多忙な身ゆえに期限

までに間に合わないこともままあったらし

書き上がらなかったことを詫びる書簡

業家として序文や題字を依頼されること

に合わなかったのかもしれない。著名な実

(『徳川慶喜公伝』)

慶喜の名誉の

れていない。

書簡には、

「悪筆ながら題

序文が滞っている」とい

と御堪へなされて、

終生之が弁解をもなさ